

## 多摩川の名脇役

### 都指定史跡の渦巻き型井戸

#### 24. まいまいず井戸 (東京都羽村市五ノ神1-1:五ノ神神社内)

「まいまいず井戸」は武蔵三井戸の1つで東京都の指定史跡にもなっています。まいまいずとは多摩地方の方言でカタツムリのことを言いますが、井戸に向かって降りる通路の形がかたつむりに似ていることからこの名前が付けられました。また、この井戸の断面の形から「漏斗状井戸」や、降り下る通路が敷設されていることから「降り井(下り井)戸」とも呼ばれています。

「まいまいず井戸」とは固有名詞ではなく、武蔵野のように脆い土壌に井戸を掘るとき螺旋状に掘り下げていくことからこのような名前と呼ばれています。

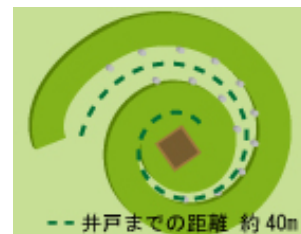


(左から時計回りに)  
地表面から見た井戸／井戸入口／五ノ神神社本殿／境内の地蔵／境内から見たまいまいず井戸 (写真-H20.9撮影)

羽村のまいまいず井戸は平安時代の806～810年（大同年間）に造られたという説がありますが、井戸の形態や出土された<sup>いたび</sup>板碑[\*1]等を見ると鎌倉時代のものではないかと推測されています。また井戸の名称は残されている普請帳から、かつては「熊野井戸」と称されていたようです。

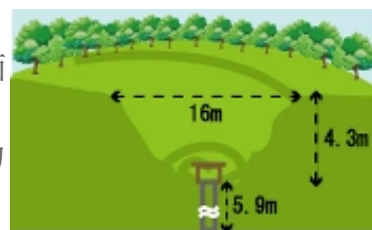
その昔、井戸がなかった頃の五ノ神村（現在の羽村駅周辺）の村民は飲み水を隣村にもらいに行ったり、多摩川まで汲みに行っていたようですが、その不便さを解消するために近くに井戸を掘ることになったようです。まいまいず井戸は一般に見られる井戸とはその形状が異なっていますが、このような井戸が掘られた背景には多摩地域特有の地質が関係しています。多摩地域は多摩川によって形成された扇状地[\*2]で、その土壌はもろい砂礫層[\*3]で形成されています。

またこの地域は武蔵野台地[\*4]と多摩川低地[\*5]に分かれていますが、武蔵野台地の砂礫層の上は関東ローム層[\*6]に覆われているため、特に国分寺崖線[\*7]<sup>がいせん</sup>より上は地表面から地下水脈までの距離が長く、深い井戸を掘らなければなりません。しかしこの時代には掘削技術が発達していなかったため、まずすり鉢状の大きな穴を硬い地盤に到達するまで掘り下げて、硬い地盤に到達してから井戸を掘るのが安全な方法だったようです。



まいまいず井戸平面図

井戸の地表面の直径は約16m、窪地までの深さは約4.3m、窪地面の直径は約5mで、井戸自体の直径は約1.2m、井戸の深さは約5.9mあります。地表面から井戸に向かって2周する螺旋状の井戸道が約40mあり、井戸ができて水汲みには苦勞を伴いました。



まいまいず井戸断面図

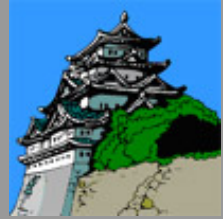
この井戸は五ノ神村の人々の共同井戸として重宝され、昭和に入ってから約200戸の家庭で使用されていたようですが、1960年（昭和35年）の町（当時）営水道の開設に伴いその長い歴史に幕を閉じました。現在は東京都指定文化財に指定され、人々が観光や散策に訪れています。

中世[\*8]の五ノ神地区には、鍛冶や鋳物の技術を持った人々が集まり定住したそうです。まいまいず井戸周辺の五ノ神地区に集落が存在したことは、五ノ神地区から出土した板碑からも推測できます。羽村は農業を主体とした地域でしたが、農業に不可欠な水（多摩川）から離れた五ノ神地区に住んでいた人々は農業以外で生計を立てていたと考えられます。また、発掘調査によって鋳工跡が発見されていることから、五ノ神地区に住んでいたのは<sup>いもじ・いものし</sup>鋳物師[\*9]の集団であったとされています。五ノ神地区は水からは離れた土地でしたが、鉄を加工するのに必要な炭は得やすい土地であったため、人々が定住し、鋳工が発達したのでしょう。

～多摩川沿いや武蔵野台地には、伝説を持った井戸が数箇所あります～

●弁慶の井戸（府中市片町・高安寺境内）

崖上にある高安寺は、要害の地（敵からの攻撃を防御したり城を  
守備するのに適した土地）で戦国時代はしばしば武将の本陣とし  
ても使われました。“弁慶の井戸”は境内西端に位置し、現在は井  
戸跡が残っています。この“弁慶の井戸”には、源頼朝の怒りを買  
って鎌倉入りを許されなかった義経一行が、この寺に滞在した際  
に弁慶が段丘崖下にある井戸水で墨を摺り赦免嘆願のために大般若経を書写し  
たことから“弁慶の井戸”と呼ばれるようになったという伝説があります。現在  
は“弁慶の井”と称する古井戸の跡が残っています。



●おねいの井戸（昭島市拝島・大日堂境内）



後北条氏が多摩流域を支配していた室町時代末期、北条氏照に仕  
えていた石川土佐守という家臣がいました。土佐守には“おね  
い”という娘がいましたが、長年眼を患っていたため、大日堂に  
参り、境内にある井戸水で眼を洗ったところ完治したといういい  
つたえがあります。この井戸は平面の形状から“お鉢の井戸”とも呼ばれていま  
す。“松原の井戸”、“花井の井戸”と共に“拝島の三井戸”として知られていま  
す。



●遅の井（杉並区善福寺・善福寺公園内）

“遅の井”は武蔵野台地のほぼ中央に位置する善福寺池の湧水の一  
つです。その昔、源頼朝が奥州征伐へ向かう際の通りのこの場  
所に飲料水を求めたそうですが、見つからなかったため自らの弓  
で七箇所土を掘ったところ、しばらくしてその七箇所全てに水が  
湧き出たそうです。水が出てくるのを今か今かと待ち望んだこと  
から“遅の井”と命名されました。現在は泉が涸れてしまったので、“遅の井の  
滝”として復元しています。



\*1 板碑 (いたび)

- ．．． 主に供養塔として使われる石碑の一種。地域・時代によって形態や石材が異なる。設立時期は鎌倉から室町時代前期に集中しているが、戦国期以降になると急激に廃れ、既存の板碑も廃棄されたり、用水路の蓋などに転用されたものもある。現代の卒塔婆に繋がる。

\*2 扇状地 (せんじょうち)

- ．．． 河川が山地から平野や盆地に移る場所等に見られる、土砂などが山側を頂点として扇状に堆積した地形のこと。

\*3 砂礫層 (されきそう)

- ．．． 砂礫層とは砂と砂利が混ざった地層のこと。透水性がよく雨の吸水もよい。

\*4 武蔵野台地 (むさしのだいち)

- ．．． 関東平野西部の荒川と多摩川に挟まれた地域に広がる台地。関東山地を穿ちながら縫うように流れ下ってきた多摩川は青梅を扇頂とする扇状地を形成した。この扇状地が武蔵野台地の基盤であり、その上を関東ローム層が数メートルから十数メートルの厚みをもって堆積している。武蔵野台地でかつて多く見られた形式の井戸が「まいまいず井戸」である。

\*5 多摩川低地 (たまがわていち)

- ．．． 立川崖線下の多摩川沿いの地域。主に砂礫から構成される。

\*6 関東ローム層 (かんとろうろーむそう)

- ．．． 関東地方をおおっている、約180万年前または260万年前から現在までに堆積した火山灰による地層のこと。主として八ヶ岳、浅間山、箱根、富士山の火山灰に由来する柔らかな赤褐色の地層で、その色から俗に「赤土」とも呼ばれる。

\*7 国分寺崖線 (こくぶんじがいせん)

- ．．． 東京都立川市～世田谷区 (立川市・国立市・国分寺市・府中市・小金井市・三鷹市・調布市・狛江市・世田谷区・大田区) に至る、延長約25km、高低差約20m位の斜面林。国分寺市付近に目立った崖の連なりがあるために「国分寺崖線」と付けられた。

\*8 中世 (ちゅうせい)

- ．．． 平安時代後期から鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、戦国時代までを中世と呼ぶことが多い。

\*9 鋳物師 (いもじ・いものし)

- ．．． 砂や粘土を使って鋳型を造り、鉄や銅を溶かして鍋や釜、寺の梵鐘<sup>ぼんしょう</sup>を造る技術者のこと。